

評者: 阿部 謹也 (一橋大学教授 ドイツ中世史・西洋社会史/ペシャワール会会員)

## 世間意識からの開放へ

## 「増補版・ペシャワールにて」を読む

私はまだペシャワールに行ったことがない。蒼穹に白い頂きを屹立させたヒンズークシの美しい山々も見ることがない。アラブのバザールも知らない。それなのに、パキスタン・アフガニスタンで医療活動を行っている福岡市出身の医師・中村哲氏著「増補版・ペシャワールにて」(石風社)を読んでいると、あたかもペシャワールのJAMS(ジャパン・アフガン医療サービス)二〇〇〇年にPMS病院に統合された)の病院で患者の膿をとり、ときにバザールでカパーブを買っているような気にさせられる。

## 現在世界の焦点

どんなに小さな町でも村でも、それなりに世界の縮図ではある。しかしペシャワールは文字通り現代世界の焦点といってもよいだろう。ここには自分達の文明の普遍性を標榜している欧米先進諸国が奉仕という形式のもとでその怠慢な素顔をみせているし、現代日本の旅行者や若者も現在の日本の病める姿をさらけ出している。旧ソ連やアメリカの露骨な干渉がなんのために行われたのか、住民は日々肌身で感じ取っている。

国連難民高等弁務官という地位や国連という名が日本では海外協力の錦の御旗にされているが、その実態がどのようなものであるのか住民はつぶさに知っている。ここには明治以来百年日本人が自分の目にかけてきたサングラスあるいは鱗を払い落とすすべてのものがある。

ペシャワールに思いを馳せるとき、私はまた東京・福岡ちう回路を通して考えてしまう。私は中村氏が糾弾している東京に住んでいる。そして年に一度福岡に行くことを楽しみにして月日を送っているといっても過言ではないだろう。それが何故なのかこれまで余り考えたことはなかったが、中村氏が生まれ、ペシャワールの会がつくられる福岡を考えてみると、そこには何らかの関連があるような気もする。

